



国際化の最前線から



大規模災害時の安全を「やさしい日本語」で担保する

弘前大学 名誉教授 佐藤 和之

エビデンスに基づく「やさしい日本語」

私たちは首都直下地震や南海トラフ地震を強く意識し、「やさしい日本語」で避難や安全の情報を外国人住民に伝える有効性について研究している。「やさしい日本語」は日本に住む外国人の命を守る情報を伝える方法として阪神・淡路大震災をきっかけに考え出された。大きな災害では行政も住民も混乱する。外国人ならなおさらである。そのため漢字圏か非漢字圏かに関わらず、日本に住んで1年くらいの外国人であれば8割以上が理解する表現を作った。その割合を維持するため検証実験を繰り返し、使える語や規則を決めた。約2,000の語と「1文あたり24拍で伝える」や「否定の表現を使わない」など12の規則に従って伝える。

命を守ることばのノーマライゼーション

大きな災害のとき外国語に翻訳できる人を探したり、翻訳ができるのを待っていたら被害は拡大するばかりだ。だから外国人が理解し自ら行動を起こせる表現で伝える。そうしたところ外国人だけでなく日本人の高齢者や子どもも行動できた。さらに情報を理解した外国人は、動きが自由にならない日本人の高齢者や障がい者を支援してくれることも東日本大震災の経験でわかった。高齢者や車椅子の人を手伝って高台に逃げるなどである。2020年の日本はコロナのために外国人観光客がいなくなって

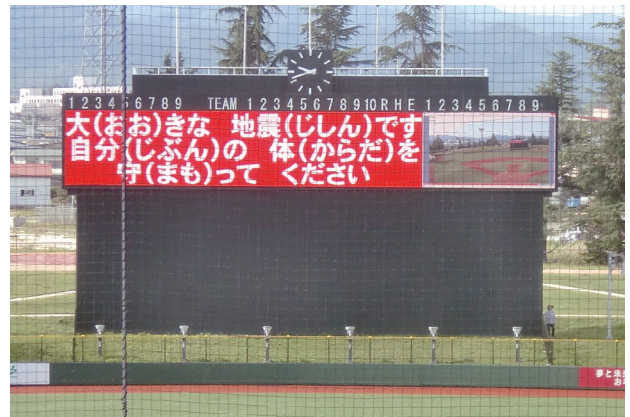


「やさしい日本語」の有効性を検証した実験参加者

いるが、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会、大阪・関西万国博覧会などで観光客が戻ったとき、「やさしい日本語」だと理解できる外国人が通訳者となって日本語がわからない外国人を安全な場所へ誘導する仕組みも考えた。

「やさしい日本語」の有効性と安全性

観光都市の弘前市は2019年に「やさしい日本語」を使って日本へ来たばかりの外国人を避難させられるかの実証実験を行い有効性を検証した。首都直下地震や南海トラフ地震が起きたときの備えとして訓練の手順や根拠を報告書にした。「やさしい日本語・ガイドライン・弘前大学」をキーワードに検索してみたい。関連文献も得ることができる。



来日直後の外国人技能実習生を「やさしい日本語」で誘導する弘前市の総合防災訓練

プロフィール

佐藤 和之 (さとう かずゆき)

弘前大学名誉教授。社会言語学が専門。構成員が混在化する現代の地域社会の言語変容研究を専門とする。「やさしい日本語」研究もその一環。地域社会に迎えたさまざまな国からの住民を情報弱者にしないための減災研究に取り組む。2000年に「やさしい日本語」研究で消防庁長官賞と村尾学術奨励賞(神戸に貢献のあった研究に与えられる賞)を受賞。